

国際常民文化研究機構のロゴ・マーク “文化を紡ぐ”



「糸車」は昭和10年代、アチックミュージアムで調査のお礼に渡していた手拭に染抜かれた民具図案の中から、日本常民文化研究所のロゴ・マーク「鋏」の生産具に対応させ、生活具から一点選びました。作図は当時の同人、藤本喜久磨によります。M・ガンジーは、機械文明の行く末を憂い、インドの農民が歩むべき道を糸車、チャルカで象徴させましたが、国際常民文化研究機構では広く「文化を紡ぐ」表徴とし、その意を豊橋技術科学大学で西洋古代史を講じ、ラテン語に造詣の深い相京邦宏先生に訳してもらいました。以下にその解説を記します。(佐野賢治)

英語の *culture* に当たるラテン語は *cultura* ですが、この言葉には「田畑を耕す」という原義がより強く含まれます。従って、この場合、*cultus*の方がより適切と思われる。この言葉は「人間の習慣」から「文化、教養」までより広範な意味を持ちます。或いは「文化」を人間の知識、知恵と読み替えるのなら、*sapientia* 乃至 *scientia* の方が一般的かもしれません。両方とも *sapio*, *scio* 「知る、理解する」の派生形です。

次に、「紡ぐ」のラテン語ですが、これを「文化の集積」と捉えるなら、*accumulatio* (積み重ねる、*accumulo* の派生形) が適当と思われます。従って、一般的には *accumulatio cultus*, 或いは、*accumulatio sapientiae* 乃至 *accumulatio scientiae* と表現するのが無難かもしれません。が、これでは単に「文化の集積、蓄積」という意味にしかなりません。研究のシンボルが糸車ということですから、「文化を織りなす」という意味では *texo* (織る、編む、組み合わせる) という単語が考えられます。この場合 *textura* (織ること、*texo* の派生形) *culturae* とすれば「文化の織りなし」といった意味になるでしょうか(蛇足ですが微妙に韻を踏んでいます)。

これは文法的に可能な表現ということで、ラテン語に「文化を紡ぐ、編む」という概念が存在するかどうかは不明です。

国際常民文化研究叢書 4
—第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学—
International Center for Folk Culture Studies Monographs 4
—Ethnology and Cultural Anthropology
during World War II and the Occupation—

発行日 2013年3月1日
編集・発行 神奈川大学 国際常民文化研究機構
〒221-8686
神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1
電話：045-481-5661(代)
<http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp>

印刷 株式会社精興社
ISBN978-4-9907018-4-0 非売品

編集 小山田絵馬 木村美江

著作権者の文書による許諾がないかぎり、法律が認める場合を除き、本書の全部もしくは一部を複製すること、あるいは送信公開することを禁じます。